

スーパーヒーローのマント

まるでハロウィンみたいな服装をしていたのは、はじめて学校に行く朝のことだった。五歳の僕の首に巻かれているのは、くたくたになった、スーパーヒーローの赤いマント。ズボンの上にはもう一枚下着を履いている。

僕はスーパーボーイだ。

もう何年もスーパーヒーローのユニフォームを手放せずにいる。着たままごはんを食べ、眠って、おしっこもする。だから、学校にも着ていくものと決めていた。

時刻は六時半。僕はキッチンで母と一緒に朝ごはんを食べている。ベイビーキャロットのスティック、ボウルに入ったピーナツバター、チョコレートシリアルを母が出してくれたところだ。

母はいつもよりおめかししている。たぶん、先生たちの第一印象を良くするためだろう。シルクのドレスは紫と銀のペイズリー柄で、角ばった肩パッド入り。金色に染められた前

髪は重力に逆らって上向きにカールして、緑色の目を縁取っている。

母がヘアスプレーをたっぷり使っているのに対して、僕の柔らかい茶色い髪は標準的なマッシュルームカット。ただし、母のヘアスプレーをさっと振りかけて、前髪を「S」字にカーブさせている。もちろんスーパーボーイ仕様だ。

「今日は授業を受けるんだから」母が言う。「コスチュームの上になにか着るか、別の服に着替えたらどう？」

スーパーヒーローのスーツに「コスチューム」という言葉が使われるのが、僕はあんまりうれしくない。「着替えないよー」そう強い意志をもって告げる。

チョコレートシリアルボウルに、母がヘルシーな脂肪一パーセントの牛乳を注いでくれる。「ずっと着つづけてたら臭くなっちゃうんじゃない」

僕はそのコメントも気に入らない。スーパーヒーローの子どもたる者、体の臭いと清潔感にはじゅうぶん気をつけて、きれいな下着を二枚も着ているんだから——ズボンの下と上に。

母が僕のそばに歩みよって、頭をぼんぼんとたたく。「お願いだから今日はふつうの服を着て」。そう説いて聞かせようとする。「学校から帰ったらまたスーパーマンになれるんだから」

スーパーボーイ！ 僕は心のなかでそう反論して、人參のスティックを掴みとってピーナッツバターに浸す。できるかぎりたくさんさんのピーナッツバターをすくいとってから、口のなかに放り込む。人參は歯のあいだで割れて、かりっと鳴る。

聞くところによると、最近アメリカでは僕と同じ歳くらいのたくさんの子供たちが、タオルを首に巻いて屋根から飛び降りて足を折ったり、もっとひどいことになったりしているらしい。なんでその子供たちは、タオルを使うなんてバカなことするんだらう。僕は本当のマントを持っていて。それが偉大なパワーと偉大な責任を僕に与えてくれているんだ。母が思考の邪魔をする。「マティー、聞いてるの？ コスチュームから着替えてもらえない？」

「コスチュームじゃないよー！」

僕は少しばかり苛立ちをあらわにする。手を震わせながら、シリアルをスプーンで口に運ぶ。けれど、手元が狂って口に入らなかった。冷たい銀器はあごに当たってしまふ。ミルクがひぎにこぼれ、シリアルは空中に舞って、それから床に散る。

「マシュー」母が言う。「自分がしたことを見てみなさい！」

僕は下を見る。ズボンの上に履いた赤いスーパーヒーローのパンツが、ミルクのしみで暗い色になっている。その小さな範囲は、まるでおもらしをしたみたい。

母はあらあらと言うように、かわいらしく目を細める。「マシュー、最高にイケてる下着のペアを洗わなきゃならなくなっちゃったみたいね。パンツの上に履くものじゃないんだから。オーバーウェアじゃなくて、アンダーウェアって言うでしょ」

「わかったよ」僕は言う。実のところ、母にはちよつとばかり心配すべき理由がある。

僕は少し前に入院して、左目のわずか数センチ上を縫っていた。

なぜ怪我したか？ 緑色をした巨大なインクレディブル・ハルクが、僕と戦いに家にやってきたんだ。庭にハルクが待っているのを見つけたとき、ドアから外に出ている時間はなかった。ハルクが暴れまわるのを止めなきゃならなかったから、僕はできる限り速く走り、ジャンプして窓を突き破った。戦いが終わったあと、碎け散った窓ガラスの三角形の破片がいくつも、血だらけになった僕の顔に刺さっているのを見て、母は失神してしまつた。

母は僕の人参スティックを一本取って、しゃべりながらカリカリかじる。「今日はじめての学校なんだから、マントは必要ない。本当の命を救えるヒーローになるための勉強をしなさい。脳外科医のブルースおじさんみたいになってもいいし、弁護士になって法廷に立って人々を助けた方がいい。いい弁護ができるんじゃない？ だってあなた、なんでもかんでも議論したがるから」

僕は弁護士になったらという提案にびっくりする。「弁護士になってほしいの？　いつも嫌なやつらって言ってない？」

「弁護士はね、お金を払わなきゃならないときだけ嫌なやつらなの。つまりその金持ちが自分の親戚じゃなかった場合ね。ともかく、別に法律の勉強をしなくたっていい。なんにだって、なりたいたいものになれるんだから。大事なのは、今日からあなたは読み書きを習うってこと。それがあとになって役立つから……それに、スーパーマンだってジャーナリストじゃなかった？　彼みたいなのライターになったらいいじゃない」

ジャーナリストやライターになるという考えは、僕にはあんまり立派に思えなかった。紙とペンを握って机に座っていたところで、どうやって人々を助けられるんだろう。

母が皿からもう一人参を掴む。突然、その目がぼっと輝く。「スーパーヒーローは社会に溶け込むために正体を隠してるでしょう。あなたみたいに、どこへ行くときもマントをつけたりしない。スーパーマンもクラーク・ケントになる。そうよ、あなたも普通の少年としてクラスメートを守るように、もうひとつの名前を持ちなさい。マシュー・ケントなんてどう？」

「ぼかっばいよ」

「なんだったらいいかしら」

「もうひとつの名前は、一文字目をそろえなくちゃいけないんだ。たとえば母さんだったら、マザー・マクシマスみたいに」

「ああ、頭韻ってわけね。じゃあマシュー・マグナニモスは？」

「意味わかんないし、チョジックと離れすぎてる」

「それなら、マシュー・モジック？」

「げげっ。チョジックのままの方がいいかな」

母は微笑んで、僕の頭をぼんぼん叩く。「そうね、それがいいわ。マシュー・チョジックなら、素敵な弁護士か医者の名前みたい」

僕は正体を隠して小さなスクールバスに乗り込む。僕がスーパーボーイだってことは誰にもわからない。他の子たちについていって、先生を紹介される。先生はすぐくやさしくてきれいだ。すぐさま、いつかプロポーズしようとか心に決める。

教室には、数字と文字のポスターが壁じゅう貼ってある。正面に、これまで見たことないほど巨大な黒板。

僕たちは数のかぞえ方と文字のつづり方を練習して、それから長いお昼寝の時間になる。昼寝中は電気もほとんど消灯する。僕は夢のなかで、ふたたびスクールバスに座ってい

る。そして今回は、バスの運転手が運転を誤って橋から落下してしまう。全員が死の恐怖へと一直線。僕はマントを身につけ、スーパースピードを使って一瞬でフロントウィンドウを突き破る。バスの下に飛んで、片手で車体を安全なところに運ぶ。誰も怪我せずに済み、かわいい先生は、僕がいかに英雄的か知ることになった。

目を覚ましたあと、本能的にマントに手を伸ばそうとする——けれど、どこにも見つからない。家にあるんだった！ 家と学校の距離が僕を不安にさせる。やがてその不安は、ゆっくりゆっくり消えていった。とはいえ、その同じ夢をそのあと数週間にわたってくり返し見るようになったけれど。少しずつ、僕はスーパーヒーローの服装をしなくなった。

数年後、ふたたび学校でマントとパワーが欲しくなる。

このときは教室で、大きな箱型のテレビから流れる中東の戦争の映像を見ていた。混沌とした、ハイテクの暴力だった。時差のため、イラク軍のスカッドミサイルが起こす爆発や炎は、緑色のナイトビジョンを通して流れてくる。ミサイルはイスラエルとサウジアラビアの一般人が住む家々の屋根に降り注ぐ。

戦争の映像を見ながら、僕はマントを身につけて飛んでいき、兵器を破壊して人々を救うところを想像する。

僕の心の目には、以前の夢みたいに、スーパースピードを使ってミサイルを空中で回収する様子が見える。その兵器を担いで高く高く上昇する。この星の外へ、宇宙空間へ——サウジアラビアの人々からもイスラエルの人々からも、遠いところへ。

ミサイルの軌道を変え、太陽に向けて力を込めて放る。スーパーブレスを使って、背後から大量の風を送り込む（宇宙には空気がないということを、僕はまだ知らない）。僕のスーパーブレスを押されて、ミサイルは遠くへ運ばれて、小さく小さくなって立ち上る太陽の炎に吸い込まれる。

さらに数年後、またしてもマントとスーパーパワーが必要になった。今回は、体育館のロッカーでふたりのいじめっ子に、体育のクラスで僕がいちばん小さいという理由で暴力を振るわれていた。ふたりの少年は僕の服を奪って、僕にシャワーを浴びせかけ、数日のあいだ感覚がなくなるほど強く腕にパンチしてくる。「ファック・ユー！ チョ、ドイツ、ク！」

どうしたらいいかわからなくなって、僕はあとから母に打ち明ける。マントがあろうとなかろうと、僕が大きな子たちに喧嘩では決して勝てないということが彼女にはわかっている。そこで編み出された解決策は、僕をギター教室に通わせること。母の見事なロジック！

クによれば、ギターを弾ければすぐクールだから、僕の三倍体重がある少年たちも、僕が小さいからといってからかわなくなるというのだ。

なんて賢い考え方だろう。

誕生日に、母は素敵なヤマハのギターを買ってくれる。それはたまたま、スーパーマンのマントと同じ赤い色をしていた。

ジューイッシュ・サンタがクツキーを食べにやってくる

クリスマスイヴの午後。ラジオからはナット・キング・コールの演奏が流れ、僕と妹はサンタを待っている。今年、僕たちは聖ニコラオの特別な目撃者になることを約束されているのだ。

陽気な男が北極から到着するのを待ちながら、ふたりはリビングの窓の結露に、指で間拔けな顔を描く。妹が描いたのは、大きな出っ歯の顔がにっこり笑っている様子。僕が描いたのは、大きな尖った耳に寄り目のモンスター。僕たちが指紋をべたべたくっつけた窓ガラスの向こうには、雪が降り積もっている。木々や生垣の色は白に消し去られている。

今年はホワイトクリスマスになりそう。

僕と妹はリビングに座っている。大きな暖炉からあたたかい空気が伝わってくる。

燃えている丸太の上には、赤い靴下が危なげにぶらさがっている。蒸気が発生するときどきパチッと音を立てて火花が散る。部屋のまんなかにはクリスマスツリーと言うべ